

親鸞仏教センター主任研究員定例講座（第Ⅰ期）

『歎異抄』思想の解明

第1回 『歎異抄』とは何か

加来 雄之

Ⅰ はじめに——定例講座「『歎異抄』思想の解明」の開催にあたって

Ⅱ 現代と『歎異抄』

- ・浄土真宗の教学において二〇世紀は「歎異抄の世紀」
- ・近世における『歎異抄』への関心——香月院深励と妙音院了詳
- ・『歎異抄』と清沢満之一モノではなく意味としての『歎異抄』の再発見（西田真因説）
- ・近代・現代における『歎異抄』への関心
- ・子安宣邦『歎異抄の近代』白澤社、2014 年）

「大事なことは『歎異抄』あるは親鸞の言葉が、いまここで反復され、地獄が体験され、回心が体験され、それが語り出されていることである。この語り出された〈事実〉によって私は「歎異抄の近代」をいうのである。」（『歎異抄の近代』18 頁）

「『歎異抄』を方法的に前提にする思想史にとって、『歎異抄』が主題としてあるのではない。『歎異抄』にあるのは本当の親鸞の言葉かといったことが問われることではない。まず問われることは『歎異抄』を原型として反復された近代の〈信〉の体験であり、そ

の〈信〉をめぐる思想的、言説的事象である。」(『歎異抄の近代』21頁)

「だから私がここでする『歎異抄』の選択は、この近代親鸞学において親鸞個人の心境告白とされている『歎異抄』を選ぶということではない。私がそれを選ぶのは、現代のわれわれに応答を促すような問いかけをもった信仰書としてである。そして私の思想史的主題を「歎異抄の近代」とするのは、『歎異抄』が近代にその〈反復〉というような〈信〉の事象を人びとにもたらすようなテキストとあるゆえである。」(『歎異抄の近代』23-24頁)

「だが『歎異抄』を表立てた暁烏敏に始まる近代日本の『歎異抄』受容の過程は、清沢を継ぐものによる師の「信」を裏切っていく過程となった。『歎異抄』の講説家暁烏は罪に泣き、救済を待つ衆生という制度としての近代真宗の内部(信徒大衆)を作りだしただけのように思われた。〔中略〕親鸞の「信」があらためて問われたのは、親鸞の末世の認識に敗戦時日本の歴史認識を重ねた三木清においてであった。」(『歎異抄の近代』「あとがきに代えて」330-331頁)

- ・私にとっての『歎異抄』——「世俗化」という課題
- ・「よきひとのおほせを信ずる」という課題のもとで……宗教言説の本質とは何か

先師……よきひとの

口伝……おほせ

之真信……を信ずる

Ⅲ 『歎異抄』とは何か

(1) 『歎異抄』の辞書的定義

①『『歎異抄』(たんにしょう)は、鎌倉時代後期に書かれた日本の仏教書である。作者は、親鸞に師事した河和田の唯円とされる。書名は、親鸞滅後に浄土真宗の教団内に湧き上がった親鸞の真信に違う異義・異端を嘆いたものである。『歎異抄』とも。』

(<https://ja.wikipedia.org/wiki/歎異抄>)

②「親鸞の語録。1巻。弟子唯円の編といわれる。親鸞没後に起こってきた異義に対し、誌の真意を伝えるようとしたもの。蓮如によって禁書とされたが、明治以降広く読まれるようになった。」(『広辞苑』第六版)

③「歎異抄たんにしょう 鎌倉時代の仏書。一巻。著者を唯円とする説がほぼ定説。成立年代未詳。他力本願の真意を伝える親鸞の言葉を掲げ、これをもとに、親鸞没後生じてきた異義を批判して、親鸞の正意を示そうとしたもの。真宗の重要な聖典として、もっともよく知られている。たんにしょう。」(『精選版 日本国語大辞典』)

④「本書には著者の名が記されていない。そのため諸説があるが、本文中にその名が見られる唯円房を著者とする説が有力である。

親鸞聖人の在世の頃より、人々の間に、真実の信心と異なる誤った考えが生じていた。本書は、聖人から直接教えをうけた著者が、聖人がお亡くなりになった後、これらの誤った考えが生じたことを悲歎し、同じ念仏の道を歩む人の不審を除くために著したものである。この書に述べられているのは、異端を弾劾するといった冷やかな批判ではなく、真実の信心を見失っていく人々への深い悲しみである。それは、著者自身によって付せられた「歎異抄」という題号からも明らかである。

まず巻頭に、撰述の意図を示した漢文の序があり、続く本文は、著者が直接聖人から聞いた法語を収録した前半の10条と、さまざまな誤った考えを挙げて著者自身の歎異を述べる後半の8条とに分れ、最後に、聖人の法語を回顧しながら、あらためて悲歎のおもいを述べている。このうち第10条は、その後半に誤った考えの生じたことを歎く文があり、第11条以下の序の体裁をとっているとも見られる。

現存するものの中では、本願寺第8代宗主、蓮如上人の書写本がもっとも古く、これには承元の法難（承元元年・1207）のときの流罪記録の文と蓮如上人の奥書がある。」（WikiArc、<http://labo.wikidharma.org/index.php/歎異抄>）

⑤「親鸞（1173～1262）の教えた真実信心に異なっていることを歎き、親鸞の教えに帰ることを呼びかける書物である。

本書には作者名が記されていないために、古くから作者について推測されてきたが、最近では本文中に名前が出る唯円（ゆいえん）であることが、定説となっている。唯円は関東の河和田（現在の茨城県水戸市）の人で、親鸞から直接に教えを受けた門弟の一人である。

親鸞滅後、直弟子の多くがこの世を去っていく中で、師である親鸞の教えがその趣旨と異なって理解されていくという現状を歎き、師の教えを改めて明らかにしたいという願いが本書を生み出したのである。

本書は序と本文18条と結語からなり、本文は前半と後半とに大きく分けることができる。前半の10条は師訓篇とも呼ばれ、作者の耳の底にとどまって決して忘れることのできない親鸞の言葉を集めている。後半の8条は歎異篇とも呼ばれ、前半に掲げた親鸞の言葉に依りながら、実際に起こっている異なった見解をあげて、真実信心を見失っていることを批判している。そして結語には、そのような異義が起こってくる原因を「信心の異なり」として押さえ、

お互いが自分の立場を正当化し、迷いを深めていくことの痛ましさを訴えている。

本書は、作者が自分を正義の立場に置いて、他の異義を正していこうとするものではなく、どこまでも親鸞の教える同一の信心に立ち帰ることの重要性を示そうとしており、親鸞の思想の核心を知る上で、欠くことのできない大切な書物である。」（大谷大学「歎異抄の世界」

<https://web.otani.ac.jp/tannisyo/>)

(2)『歎異抄』の基本的性格

『歎異抄』は、親鸞の面授の弟子が、親鸞の生の声を伝える唯一の現存する著述である。

しかし、『歎異抄』は、単なる親鸞の言行録でもなく

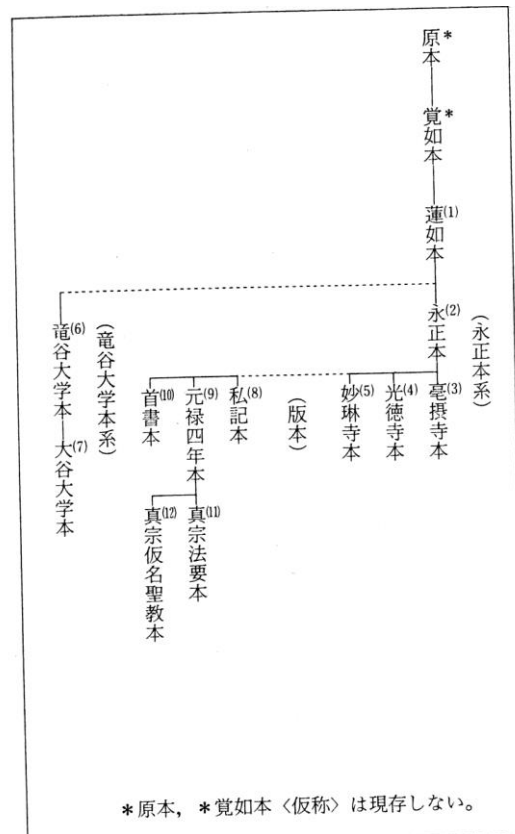
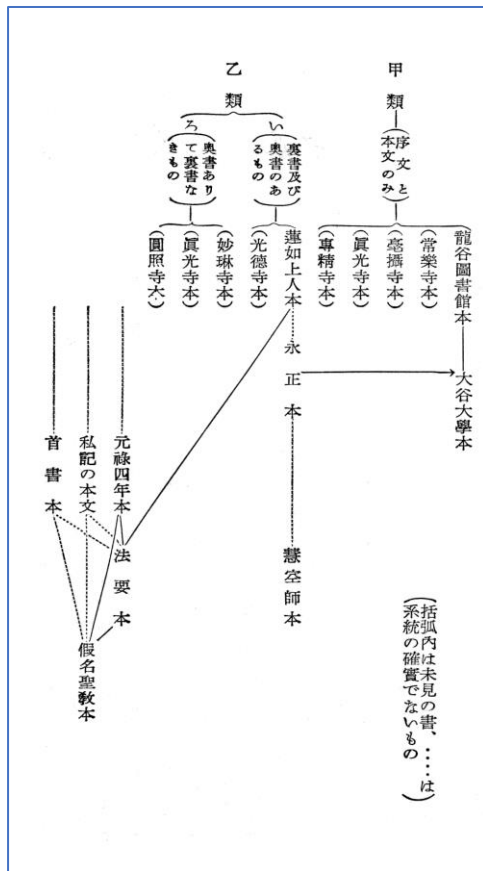
また『歎異抄』は、単なる真宗の教義書（入門書）でもない。

『歎異抄』は「先師口伝の真信に異なることを歎き」という切実なそして明解な問題意識をもっている。その「先師口伝の真信」をあきらかにするという使命を、「歎異」という批判精神に立ち、親鸞聖人の「オホセ」「物語」（三種のオホセ）を適切に配置することで果たし遂げようした一部の著述であると理解したい。

(3)『歎異抄』の諸本

①『歎異抄』の諸本の系統

『歎異抄』の諸写本・刊本の系統図（左・多屋『歎異抄新註』、右・佐藤『歎異抄論註』）



【第1表】

・歎異抄の写本類が大きく二つの系統に分けられることはほぼ認められている。それは「序と本文だけのものと序・本文にあわせて「流罪記録」や蓮如の奥書を有るものである。

・多屋『新註』は、「私は巻末に文の無いのが、歎異抄の古い形であると思ふので（解題参照）、この本〔「大谷大学本」〕を活字に移した次第である。」（多屋頼俊『歎異抄新註』、法蔵館1頁）と述べている。

・佐藤正英『論註』は、「歎異抄は何時知られたのか」という問題提起をして、蓮如本はもっとも古い写本であると同時に、蓮如本歎異抄から歎異抄は知られるようになった。このことは蓮如本以降に『歎異抄』が世に広がったことを暗示しており、そうであれば蓮如本がすべての写本の原本になると推定している。

・本講座では蓮如書写本『歎異抄』をテキストとする。その理由は、もっとも古い写本という

ことと、加来の個人的な感銘に基づく。

②本講座でのテキストの選び

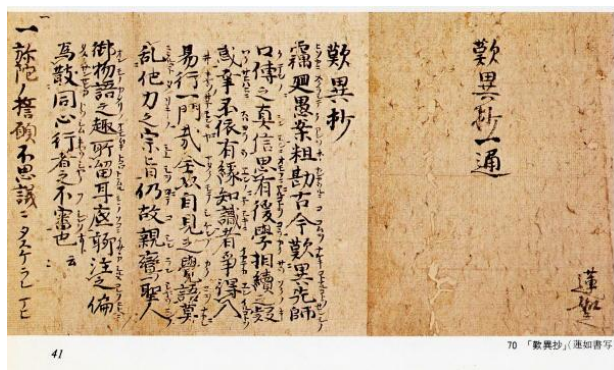
「蓮如本」―石田瑞麿・佐藤正英など。

「永正本」―金子大榮・安良岡康作など。

・金子大榮「永正本はとくに助詞が効果的に使用され、かくしてこの抄特有の深い宗教感情が一層豊かに表現されている」など。ただし安良岡は仮名を漢字に変えるなどの編集をしている。

参照：端之坊旧蔵永正本 (<https://web.otani.ac.jp/tannisyo/>)

③蓮如書写本の特徴



- ・『歎異抄』最古の写本（蓮如四十歳ころ、もしくは六十五、六歳ころ）
- ・本来は冊子本（袋綴）であったのを、江戸時代に二巻の卷子本に改めた。
- ・用語例からもっとも古体を残している

（仮名遣いなどに蓮如の影響はない）。

- ・文字の誤脱等の訂正がある。
- ・序と付録・奥書以外は漢字片仮名交じり文
- ・一つ書き
- ・連番（一～十八）

- ・分かち書き。
- ・漢字の使用は少い。
- ・表現の独自性と読みにくさー「所留耳底」「覚語」「学問」と「学文」「アシク」「相論ヲタ、ン」など。
- ・フリガナは最小限。
- ・付録「弾圧の記録」
- ・蓮如奥書

④蓮如書写本『歎異抄』の構成と呼び方（案）

- ・ 外題
- ・ 内題
- ・ 序（漢文序、真名序、前序、総序、）
- ・ 本文十八章

本文の一つ書きの一つ一つは「第～章」と呼びたい。

第一章から第九章までは「垂師訓篇」と呼ぶ。

第十章（中序、後序、異義篇序、成上起下、）。

第十一章から第十八章までは歎異編と呼ばずに「誠異義篇」と呼ぶ。

「条」は、第十一章から第十八章に説かれる異義についての名称とする。

- ・ 跋（後序、後述、述懷篇、第十九条など）
- ・ 付録（裏書、流罪記録など）
- ・ 蓮如奥書

Ⅲ 『歎異抄』問題

(1) 『歎異抄』問題

・「私にとっての親鸞は『教行信証』の親鸞であって、たとえば『歎異抄』の親鸞ではない。

歎異抄は他人（唯円）の著作であって、親鸞のものではないのだから、それは他の文献と同様に補助材料以上ではない。」（今村仁司『親鸞と学的精神』岩波書店、3頁）

・「末木「単純に親鸞と『歎異抄』を同一視するのは間違いだと思っています。」今村「私個人の意見では、清沢が『歎異抄』を世に知らしめたのですが、ある意味で余計なことをしてくれたと感じます。そのために、大甘の自己弁護的な親鸞論が明治以来作られ、それが非常に影響を及ぼしてしまった。『歎異抄』問題は徹底的に考える必要がある。」（今村仁司・末本文美士「清沢満之と仏教の今日的再生」『思想』967号、2004年11月号）

(2) 『歎異抄』批判

①『歎異抄』は言行録・聞き書として不十分である。『歎異抄』は親鸞という人格・言葉・生き方を正しく伝えていない。

・『歎異抄』は反権力・合理精神に生きた親鸞を否定した、親鸞の弁証法「不可思議」を理解しなかった歎異抄、など。一マルキシストの親鸞観からの批判。林茂雄『親鸞の思想と生涯—親鸞をけがす歎異抄』（1956年、三一書房）など。

・「彼は本書の序文において、「歎異先師口伝之真信」と述べ、「口伝」を伝えるをもってみずからを正統化した。絶対的権威たる親鸞の「口伝」こそ、この著者の「歎異」の拠点なのである。」（古田武彦『親鸞思想』342頁）「革命的批判精神の創造者が、みずからの門弟や子孫によって、権威主義の偶像として祭られ終わった運命」（『親鸞思想』343頁）「歎異抄は、かか

る情勢の下、親鸞の権威化のために文献上最初のイデオロギーを提出した。これは著者の立つ史的位置を示すと共に、本願寺教団の権威主義への道を開くものであった。」(『親鸞思想』346頁)

②『歎異抄』は、親鸞自身の著述で展開されるあの独創的な思想を正しく伝えていない。『歎異抄』は真宗の入門書として適切ではない。

・「わたしも『歎異抄』が好きである。〔中略〕これが親鸞の思想・信仰を窺ううえにちょうど手ごろな入門書として扱えるという意味である。しかしこの入門書が読者をしてここに停滞させ、これより先に進むことを躊躇させ逡巡させるようになったら、これは危険なものに変貌するだろう。〔中略〕これが親鸞の思想・信仰と十分、重なりうると見なせるか、疑いを抱くようになった。」(石田瑞磨『歎異抄—その批判的考察』1-2頁)。「親鸞の教えと『歎異抄』の間には絶対的な距離がある」(山折哲雄『悪と往生——親鸞を裏切る『歎異抄』』(中公新書))。

・寺川真宗『歎異抄の思想的解明』など。

③『歎異抄』は、悪を肯定する思想、道徳破壊の書、危険な書である。

④近代的解釈のもつ問題性——「近代的世界観が『歎異抄』を誤解させた」(梅原猛『誤解された歎異抄』7頁)。

⑤ 現存する『歎異抄』は改変されている。

・佐藤正英『歎異抄論註』—佐藤氏の主張の概要。

『歎異抄』の原本が不在であり、蓮如本が唯一の孤本である。覚如は『歎異抄』を書写した。覚如は『歎異抄』を故意に無視した。

「唯円、あるいは一個の述作としての『歎異抄』は、覚如にとって不協和音を発する異物であった。…唯円は覚如にとってあってはならぬ存在であった。…『歎異抄』は覚如にとって、自

身の覚えのための親鸞の言行に関わる文献のひとつにすぎず、唯円による一個の述作という痕跡は、意識的に抹殺される。」（佐藤『歎異抄論註』78頁）

つぎに蓮如は覚如が唯円が唯善に与えた遺書を錯誤して写した。

唯円自筆本は蓮如本のような一部構成ではなくて、まず「異義条々」があって付録として「歎異抄」が添えられるという二部の構成であると結論付ける。

・尾野義宗『歎異抄再発見への道』—『歎異抄』は覚如への手紙

⑥切り取られた『歎異抄』

・『歎異抄』には印象的な言葉が散在している。その言葉が残されただけでも『歎異抄』が存在する意味はある。

・構造的な読みの必要性— 一部作としての『歎異抄』